
Three kingdoms wars

tonakai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Three kingdoms wars

【Nコード】

N1920Q

【作者名】

tonakai

【あらすじ】

遠い昔、遙か彼方の大陸で……

戦争が終わり、2年後、一人のジェダイの騎士が復興間もないヤヴイン4から旅立とうとしていた……

Three kingdoms wars エピソード1・1

遠い昔、遙か彼方の大陸で……

Three kingdoms Wars

エピソード1

新たなる大地

外宇宙からの侵略者、ユージャン・ヴォングとの戦い、ユージャン・ヴォング大戦は苛烈を極めた。

多くのジェダイ達や新共和国の軍隊が倒れていく中、ついにユージャン・ヴォングは首都星コルサントにまで迫り占領されてしまう。

この危難に偉大なるジェダイ、ルーク・スカイウォーカーは反撃にでた。

苛烈なる戦いの末、スカイウォーカーはユージャン・ヴォングの最高大君主、シムラ・ジャーマンを打倒し、銀河系に平和と秩序を取

り戻す事に成功した。

ユージャン・ヴォングとの間に和平条約を締結し、平和への道が開かれたかに見えた。

しかし、またもや銀河系に戦争が起こる。群虫戦争が勃発したのだ。ジェダイや銀河連邦自由同盟はこの危難を辛くも収めたが銀河系は大いに疲弊した。

戦争が終わり、2年後、一人のジェダイの騎士が復興間もないヤヴィン4から旅立とうとしていた……

ヤヴァン4の宇宙港に2人のジェダイがいた。

一人はこの銀河系で最も偉大な騎士の称号、『グランド・マスター』の称号を持つ騎士、ルーク・スカイウォーカー。

もう一人は彼の数多くいる弟子の一人であるジェダイの騎士、北郷一刀であった。

「行くのかい？」

ルークの問いかけに一刀は静かに頷き答える。

「はい、マスター。自分に今何が出来るのかを見つけに旅をしたい

「と思います」

ルークはこの若いジェダイを静かに見送る事に決めた。

「……自身の天命を見つける旅か……きつと長い旅になるだろう。私も天命を見つけるまでに長い時間を要した……だが、見つけた。時間は掛かるが見つける事は出来るだろう」

そう言いながらルークは自分の弟子に最後の別れを言う。

「さらばだ、友よ。フォースと共にあらん事を」

一刀もまた静かに頭を下げ、別れの挨拶を言う。

「さらばです。マスター。フォースと共に」

そう言い一刀はスペースシップに乗り込んだ。

一刀がスペースシップをハイバースペース航行に起動した時だった。計器が突然エラーメッセージの電信音を発した。

「何！？ うわあああああああああああ！？」

何も無い空間、其処にビキニ姿のマツチヨがクネクネしながら氣を失った一刀を見ていた。

「いや〜ん♪ どの世界のご主人様も素敵だけど、このご主人様はダンディーで大人の色を感じるわ〜」

そう言いながら自分の唇を気絶している一刀の唇に持っていこうとした時だった。

一刀が目を醒ます。

「！？！？！？！？！？！？」　うわあああああああああ
 ああああああ！？　化物おおおおおおお
 おおおおおお！？」

そう言い、一刀はフォースの衝撃波をマッチョなオカマに叩きつける。

「ぬつふゝゝゝゝゝゝゝゝゝん　無駄、無駄、無駄、無駄
無駄、無駄、無駄、無駄、無駄、無駄、無駄あ
あああああ！！」

マッチョなオカマはそう叫びながら股間をいきり立たせ、マッスルポーズをとりフォースの衝撃波を防ぐ。

「な、何iiiiiiiiiii! ? コイツ、フォースエアがきか

ない!？」

ある意味、ユージャン・ヴォングと似た現象に困惑しながら一刀はライトセイバーを抜き放つ。

青色の光刃が約35センチの柄から1メートルくらい伸びる。

（クソ!？ 何だ!？ アレは!？ エーリアン種族でこんな奴いなかったぞ!？ ユージャン・ヴォングの親戚か？ 更にコイツからとんでもない量のフォースを感じる……マスターと同じかそれ以上だと!？）

明らかにヒューマンなのだが何故か知らない悪寒にさいなまれる。

「んも~~~~~このご主人様は攻撃的ね~~~~、でも、其処がワイルドで素敵だわ~~~~」

体をクネらせるマツチヨ。

正直、敵意は無い事はフォースで感じられるが、その行為や仕草に悪寒をより一層強めた。

オカマと睨めっこしていても仕方ないと思った一刀はライトセイバーを構えながらマツチヨなオカマに質問した。

「お前は誰だ？ そして此処は!？」

オカマは答える。

「私は貂蟬、しがない踊り子よ〜ん。そして此処は『世界の狭間』」

と呼ばれる空間よん」

しがない踊り子という所にツツコミを入れたいのをジェダイの修行で培った忍耐で辛抱し、気になったフリーズを質問する。

「『世界の狭間』とは？」

その問いかけに答えるオカマこと貂蟬は答える。

「此処は有りとあらゆる世界の外側の世界、世界の外側、世界の断りから外れた空間よ」

一刀は何とか頭の中で整理し問う。

「つまり、この世界は私の銀河系や違う銀河系とは違う、世界の真理から外れた世界と言った所か、成る程、この世界には私やあなたしかフォースを感じられない。何も無い世界だ」

貂蟬は感心しながら言葉を紡ぐ。

「あんら~~~~~、この世界のご主人様は中々理解力が有るわね~~~~更に冷静だわ~~~~さすがジェダイの騎士ね~~~~」

一刀とてユージャン・ヴォング大戦や群虫戦争を生き残ったジェダイナイトなのだ。

それ以上の危機や絶望的戦場を経験している。

25歳の年齢の内、10歳の頃から戦争を経験している。

その中で一刀は冷静な判断と強靱な心、そして、ジェダイの騎士に必要な忍耐と使命感を培った。

この程度の事で慌てる一刀ではない。

ライトセイバーをしまい、更に問いかける一刀。

「此処から抜け出す方法は？」

一刀の質問に貂蟬は答える。

「有るには有るわ、でも、ご主人様の世界には戻れない。ご主人様には違う世界、所謂、『三国志』の『外史』と呼ばれる世界に行ってもらうわ」

一刀はまたも聞きなれない言葉を聞く。

「『三国志』？ 『外史』」

その問いかけに貂蟬は頷く。

「そ、『三国志』と言うのは地球という遙か遠い惑星の一大陸の歴史小説よ。因みに『外史』とは『こうなったら面白いな』や『こうなったら良いのに』という人の想いが作り出した違う世界ね。因みにご主人様に行ってもらう外史は平行世界の地球にいるご主人様が作り出した外史な訳。その世界は今、何らかの原因で滅びかけているわ。その原因を調査して滅びを止めて欲しいの」

一刀は顎に手をやりフムと頷く。

「つまり……地球にいる並行世界の私の作り出した外史の滅びの原因の調査と解決が私への依頼か？ 貂蟬。その為に私をこの空間に呼びつけるとはな」

その言葉に純粹に驚く貂蟬。

「あら、私、ちゃんと心の障壁は張っていたのに如何して解ったの？」

その問いかけに鼻を鳴らしながら一刀は答えた。

「推測だよ。わざわざ、丁寧に私の質問に答えてくれた時からだ」

その言葉に貂蟬はニヤリとする。

「あら、カマかけられたみたいね」

その言葉に一刀もニヤリとする。

「それでもジェダイの騎士だ。それくらいの洞察力は身につけている」

そう言う一刀は真面目な顔になり、貂蟬に言う。

「貂蟬、その願い確かに聞き入れた」

その言葉に貂蟬は驚く。

「いいのね？」

頷きながら言う一刀。

「ああ、感じるんだ。君から大いなる懐かしさと悲しみが、ソレがこの任務を受ける理由だ」

その言葉に貂蝉は内心喜びながらも頷く。

「そう、なら送るわね。『外史』へ」

「ああ、頼む」

そう言うとき突如、一刀の体が光り出す。

「行ってらっしゃい。フォースと共にね、ご主人様」

その貂蝉の言葉に驚きながらも微笑みながら一刀は答える。

「ああ、フォースと共に」

そう言い残し、一刀は空間から消え去った。

光が晴れて、一刀が瞳を開き見た物は地平の果てまで広がる荒野だった。

「此処が『三国志』の『外史』か……物語と言う事は人は確実に存在するのだろうが、まさか荒野のど真ん中に移動させられるとは……」

一刀はとりあえず自分の持ち物を確認した。

服装はジェダイナイトフードコートにジェダイの服、腰には小型のソーラーパネル型ライトセイバー充電器にワイヤーアンカー、小型医療キッドにライトセイバー。

試しにライトセイバーを機動してみたら正常に作動した。

一刀はライトセイバーをしまうと顎に手をやりながら呟く。

「フム、ライトセイバーは使える。これは幸いだ。後は町でも行つて情報を集めるか……」

そう言いながら一刀はフードを被り、歩き出した。

暫く歩いていると3人組が一刀の前を塞ぐ。

「兄ちゃん、命が惜しかったら持ち物置いてうせな」

「そうだが、兄貴の言つとおりだな」

「そうなんだな」

3人組を見やりながら一刀は右手を正面にやり左右に翳しながら言う。

「君達は私から追剥をしたくなる」

そう言つと男達は目が虚ろになり、一刀の言葉を復唱した。

「「俺達はアンタから追剥をしたくない」」

一刀は手を左右に振りながら言う。

「家に帰り人生を考えろ」

また男達是一刀の言葉を復唱する。

「「家に帰り人生を考えろ」」

一刀はジェダイが得意とするマインドトリックを使って3人の男達を退けた。

フォースで他人の心を読み取る力に関連して他人の心に確信を植え付け、行動をある程度操ることができる。フォースを集中させながら、ヒラリと掌をかざし相手に話しかけると、相手もそれを復唱し、その言葉の通りに思考しそれを鵜呑みにするという技ではあるが欠点もある。意思の弱い者や義務的に物事を行う者にしか通用しないのだ。

（どうやら、言葉は通じるらしい……）

考えながらも一刀はフォースで小石を動かしながら呟く。

「彼等の意思が弱くて助かった。それにフォースは有る程度通用するらしい」

そう言いながら一刀は岩陰に気配を感じる。

「其処にいる者、出てきてくれるかな？」

その言葉に岩陰にいる人物に語りかける。

其処から現れたのは赤みがかった桃色の髪をした18歳くらいの綺麗な少女が出てきた。

その手には綺麗な少女が持つには不釣り合いな大きな剣が握られていた。

「あの……その……私の名は姓は劉、名は備、字は玄德と言います……貴方は？」

オドオドしながらも名乗る劉備と名乗る少女。

「私は北郷 一刀、字とやらは無い。ジェダイの騎士だ」

ソレに返礼する様に名乗る一刀。

「字が無い？ ジェダイの騎士？」

一刀の聞きなれない言葉に一刀は考える。

（どうやらジェダイを知らないらしい……言葉は通じるみたいだ。今はソレで良しとするか……）

一刀はジェダイについて説明した。

「ジェダイ騎士とは銀河系の自由と正義の守護者であり、フォースの探求者だ」

「銀河系？ フォース？」

一刀の説明にまたもや首を傾げる劉備。

（……困った……フォースは兎も角、銀河系を知らないとは……どれほど遅れた文明なんだ……歴史小説の登場人物だから仕方ないか……多分、超古代の文明を題材にしたストーリーなんだろう。下手したら宇宙船すら知らないか？）

内心頭を抱えながら一刀が口を開こうとした時、2人の気配を感じ取った。

「桃香様!!」

「お姉ちゃ~~~~ん」

それは2人共、少女の声音だった。

「あ！ 愛紗ちゃん！ 鈴々ちゃ~~~~ん！ こっちこっち!!」

劉備はそう叫びながら二人の少女を呼ぶ。

黒髪の少女は劉備を桃香と呼んでいた事から彼女の愛称だと判断した。

黒髪の少女は軽く息を整えると劉備に説教を始めた。

「桃香様！ あれほど一人で行動するなど言っただではありませんか！！ ソレを勝手に走り出して、桃香様にもしもの事があれば……」

「ニヤハハ、お姉ちゃんは弱っちいから愛紗が心配するのだ」

一刀を余所に3人は賑やかに話し出した。

一刀は女、3人寄ればかしましいを体感しながらも割って入った。

「あゝすまないが君達は一体……」

黒髪の少女がソレに気付き、高圧的な態度で言う。

「貴公は？」

その余りな態度に一刀は苦笑しながらも答えた。

「北郷 一刀だ。ソレとお嬢さん、人に名を尋ねる時は自分から名乗りを上げるが礼儀と思うがどうだろうか？」

一刀は老婆心で忠告した心算だったが黒髪の少女は馬鹿にされた勘違いしたらしくその態度を硬化させた。

「失礼した……我が名は関羽。劉備様に使える者だ」

赤い髪の毛の少女もソレに続いて元気一杯に名乗りを上げた。

「鈴々はね、張飛っていうのだ！」

その名乗りに一刀は疑問に思った事を口にした。

「先ほどから名前と違う名で呼び合っている様だが……？」

その言葉に劉備は驚きながら質問した。

「え！？ 真名を知らないのですか！？」

聞きなれない単語に一刀は首を横に振りながら問いかける。

「いいや、知らない。マナなるものは今までに聞いた事もないが……」

劉備は真名について説明する。

ソレを聞きながら一刀は顎に手をやりながら呟いた。

「その真名なる物は神聖な名で呼ぶことを許可しないと呼んではならない名前か……しかも本人の許可無く呼ぶと殺されても文句が言えないとは……物騒な風習だ」

所変われば習慣や風習も変わる。

数ある世界を抱える銀河系の秩序を守るジェダイにしても始めて聞

いた風習に戸惑うが、まあ、慣れだろうと割り切り、話を進める。

一刀は自分の話をした。

自分はこの世界とは違う銀河系と言う場所から来たこと。

自分がジェダイの騎士である事。

自分はある使命を帯びてこの世界に来た事。

多分、自分は元の世界に帰れない事などを話した。

話を聞き終えた劉備は関羽に問うた。

「愛紗ちゃん、もしかして、この人じゃないかな？ 管輅の占いの天の使いって……」

その言葉に愛紗も頷きながら答える。

「そういえば……特徴も似ておりますね……白い衣を身に着けていますし……ただ、蒼く輝く剣は持っていませんが……」

「絶対そうだよ！ 銀河系なんて聞いたこと無い世界から来たって言うていたし」

そう言う劉備は一刀に問いかける。

「北郷さん、北郷さんは蒼い剣とか持ってます？」

その問いかけに一刀は内心驚きながらも頷いた。

「蒼い剣を指すのがライトセイバーならこれのことかな？」

そう言いながら腰に吊るしてあるライトセイバーを取り出し、起動した。

プシューと力強い音と共に約１メートルの青色の光刃が煌く。

その様子には３人は見惚れる。

「綺麗……」

「美しい……まるで青空を刃にした様な美しさだ……」

「綺麗なのだ……」

ソレを余所に一刀はライトセイバーをしまい、３人に問いかけた。

「これで満足したかな？」

その言葉に３人は口々に言う。

「ホラ、絶対そうだよ！！　この人だって！」

「確かに……綺麗な蒼い剣でした……」

「綺麗なのだ」

４人は町に移動した。

酒場で皿を洗いながら一刀は言う。

「大体解った。その管輅なる占い師が『蒼天より光に包まれし白き衣の天の使い。この大地に降り立ち、蒼い剣と不思議なる力で大いなる災いを打倒する』と言うのが占いの内容で君達は戦乱の世を治める為に旅をしているのか」

その言葉に皿を拭きながら劉備が言う。

「ハイ！ そうなんです！ ご主人様！」

その言葉に感心しながら頷く一刀。

「そうか……立派な志だな桃香」

「えへへ……」

そういわれ照れる桃香。

3人は道すがら一刀に真名を許したのだった。

そして、桃香が自分の下に付きたいと言った事から一刀をご主人様
といい始めた。

最初の内は一刀が難色を示したが桃香と愛紗の熱意に根負けした形

となった。

しかし、ジェダイの忍耐と交渉能力を上回る乙女の決意に一刀は内心感心したのは一刀だけの秘密だ。

「だがな……志は高くとも無銭飲食は良くないからな……」

「……ハイ……」

そう言うと桃香は言う。

因みに、愛紗は薪割り、鈴々は水汲みだ。

4人が其々の作業を追えた頃には昼過ぎだった。

「流石に疲れた」

一刀の言葉に桃香と愛紗が答える。

「そうだね……」

「ええ、流石に薪割りや水汲みは堪えました」

「お腹減ったのだ……」

その時だった。店のオバちゃんが一刀達に4人分の食事を差し出したのは。

「食べな、流石に疲れただろ？」

その言葉に一刀は問うた。

「女将、宜しいのか？ 我等は金が無い身だが？」

その問いにケラケラ笑いながら言う。

「構いやしないよ。アンタ等のお陰で売り上げが上がったんだ。コイツは感謝の気持ちさ」

そう言われ一刀達は遠慮無く頂いた。

食事も終わり、御暇しようとした時だった。

「コイツを持っていきな」

徳利を差し出す女将に一刀は問う。

「宜しいのか？ 女将？」

女将は笑いながら答える。

「構いやしないよ。ソレにアンタ等が話す夢、私じゃ好きだよ」

その答えに一刀は深々と頭を下げてお礼を言う。

「感謝します。女将。有り難く頂戴いたします」

3人もまたお礼を言う。

「有難う御座います」

「有難う御座います。女将」

「有難うなのだ！」

そう言うと4人は店を出たのだった。

4人は桃が咲き乱れる場所に差し掛かった。

「美しいな……」

一刀の言葉に愛紗が答える。

「ええ、見事な桃の花です」

桃香もまた頷きながら言う。

「そうだね……」

鈴々も喜びながら言う。

「そうなのだ!!」

桃香はある事を思いつき、両手を叩く。

「そうだ！ 此処で義兄弟の誓いをたてようよ」

その言葉に愛紗も頷く。

「それは名案です」

鈴々も笑いながら言う。

「賛成なのだ〜！」

不安そうに桃香は一刀に尋ねた。

「どうかな？ ご主人様？」

その質問に一刀は微笑みを持って答える。

「賛成だ」

その微笑に顔を赤くした3人はソレを隠す様に自分達の獲物を取り出す。

（な！？ 彼女達の武器に使われているのはフリク合金か！？ 製造技術が確立されていたのか！？） 製

改めて見た武器は3人ともフリク合金で作られた武器だった。

この合金はライトセイバーの光刃にも耐えられる数少ない合金で非常に高価で高等な精錬技術も必要な合金だった。

内心驚きながらも一刀もライトセイバーを取り出し光刃を煌かせる。

桃香が先ず始めに靖王伝家を掲げながら言う。

「我ら三人、姓は違えども兄弟の契りを結びしからは！」

続いて愛紗も青龍偃月刀を掲げて高らかに詠う。

「心を同じくして助け合い、困窮する者たちを救わん！」

鈴々もまた身の丈を遙かに越える蛇矛を掲げ詠う。

「悪い奴等をぶっ飛ばし、皆の笑顔を守るのだ！」

最後に一刀がライトセイバーを掲げ詠う。

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を！」

こうして4人は桃園の誓いを立てた。

Three kingdoms wars エピソード1・2

Three kingdoms wars エピソード1・2

一刀達4人が桃園の誓いを立ててから町で日雇いをした兵を引き連れ公孫賛の領地へと赴いていた。

桃香の提案で伯珪の所に転がり込んで客将をして働こうと言う提案に3人が賛成したのだった。

兵を集める金は一刀が紙を数枚作りソレを売り飛ばした金で集めた。

この時代はどうやら紙はとても高価なものだとか。

一刀としては紙など廃れた物で余程の公的な書類にしか使われない代物になっていたが、ルークやパダワン時代の農作業で一応そう言った技術を習った事を思い出しながら作った。

何故この様な回りくどい事をするかと言えば、一刀達は金も地位も無い、言ってみれば志がでかいだけの人達でしかない。

そんな連中に幾ら桃香の学生時代の友とは言え一領主が相手にするとも考えにくい。

そこで一刀の提案で兵を率い、公孫賛に自分達が一勢力である事を認識させ、交渉のテーブルに着かせる狙いがあった。

後は、一刀が今まで培った交渉術を駆使すればいいだけだ。

旧共和国時代、ジェダイは銀河系の内乱やトラブルの種を未然に防ぐ公証人の意味合いが強い騎士団だった。新生オーダーになってからもルークの反対や難色を余所にその様な政治的駆け引きを要求される事が多かった。

一刀もまた交渉を行い、各惑星の住人に拳兵してもらったり、新共和国離脱を思いとどまらせる為の交渉を行ったりもした。

彼の偉大なるジェダイマスター、オビィワン・ケノービは交渉術の妙から“交渉人”の異名を馳せていた。

兎に角、一刀達は公孫賛の城へ赴く事にした。

公孫賛との謁見を許された一刀達4人は、謁見の間に通される。

暫く待っていると公孫賛と思われる人物が現れた。

「久しぶりだな桃香、元気にしていたか？」

その問いかけに桃香も嬉しそうに挨拶をする。

「白漣ちゃん！ 久しぶりだね〜」 元気だったよ」

余り領主の立ち振る舞いではない。まるで女子高生みたいな会話に
一刀は戸惑いつつも交渉に入るように諭す。

「友好を暖めるのも決行だが桃香、本題を忘れるなよ」

その言葉に桃香もハツとして本題に切り出した。

「そうだった。白漣ちゃん、お願いがあるの」

その言葉に公孫賛も本題に入った事を理解する。

「何だ、桃香？ 私に叶えられる願いか？」

その問いかけに桃香が頷きながら答える。

「うん、あのね、白漣ちゃんの所で暫く客将をしたいの。駄目かな
？」

その桃香のお願いに白漣は試すように言う。

「そうか、解った。で、兵の数は？」

その言葉にうつろたえる桃香。

其処に一刀が割って入る。

「伯珪殿、御話中申し訳ない。私の名は北郷 一刀と言います。我々には兵と呼べる者が存在しないのです。此処に来る途中で町にい

る住民を金で雇い、兵を装いこの領地に來たしだいです。これは私の桃香と貴女様との友情を知らぬ無知故の行動、どうか桃香を責めないで頂きたい」

その言葉に公孫賛も解っていたらしく気にするなと言う。

「気にしなくていい。私が貴方と同じ立場なら同じ事をした。ただ、友情を盾にした交渉が気に食わなかったからカマをかけただけさ」

一刀が真実を話したのはこの公孫賛が良い意味でも悪い意味でも裏表無い人間と洞察したからである。

ソレならば無用な疑念を抱く前に真実を打ち明け、交渉しやすくする事にした。

公孫賛とて一刀が誠実な態度で臨んだ事と桃香が真名を許すほどの人物と言うことで一応の信用を置いて話をした。

「ソレと私と話す時はそんな硬つ苦しい話し方はしないでいい。後、私の事は白漣と呼んでも構わない」

その言葉に一刀は驚く。

「宜しいのですか？ 言葉は兎も角、真名を許すなど？」

その言葉に公孫賛はケラケラ笑いながら言う。

「ああ、桃香が真名を許すほどの人物だ。構わんよ」

そう言われ一刀は崩した喋り方をする。

「有難う、白漣。所で君の後ろの右の柱の影に隠れている人物も紹介してくれると有り難いのだが？」

その言葉に白漣や桃香は勿論、愛紗や鈴々すら気付かなかつたらしく不振な顔をする。

「いやはや、気配を絶って隠れていた心算ですが……こつもアッサリ見つかるとは……何時からですか？」

そう言いながら薄い青髪をした少女が柱の影から現れる。

少女の質問に一刀は完結的に答えた。

「最初からだよ、お嬢さん。気配を絶つてはいてもフォースの前では無意味だ」

その言葉に少女は問いかける。

「フォースとは？」

一刀はその疑問に答える。

「フォースとは万物に満ちる力の事だ。または世界を形成する理とも呼ばれる」

その言葉に顎に手をやりながら言う。

「フム、ソレは面白い考えた。ソレを知る貴方は仙人の類かな？」

一刀は考えながら言う。

「フム……仙人か……ある意味でソレに近い存在とでも述べておう」

その言葉に興味を示した少女は問いかける。

「では、証拠を見せて下さらぬか？」

その挑むような問いかけに一刀は目を瞑り、右手を少女に差し出す。

「……」

念じる様に一刀はフォースに干渉する。

すると少女の体は宙に浮かび上がる。

「な！？ 何と……」

少女の驚きと周りの息を呑む気配を感じながらも一刀は両手を掲げ、少女を更に宙に上げていく。

天井ギリギリまで上げた一刀は天に掲げた両腕を動かす。

その瞬間、少女は謁見の間の空中を飛び回った。

一通り空中遊泳をさせた後、一刀は少女を元の位置に降ろす。

「これで満足したかな？」

一刀の問いかけに少女は瞳を輝かせながら言う。

「ああ、大変貴重で楽しい時間を過ごさせてもらった」

そう言う少女は自分の名を述べる。

「名乗りが遅れたな。すまない。私の名は趙雲、字は子龍だ。真名は星と言う。よろしくお願いいたす。『天の御使い』殿」

その名乗りに一刀が戸惑う。

「いいのか？ 真名を名乗って？」

その問いかけに星は爽やかに笑いながら言う。

「貴方様なら構わん。貴方様はとても面白い方だ。それにこう見えても人の見る目は有る積もりだ」

そう言われては一刀もそれを素直に受け取る事にした。

「私の名は北郷 一刀だ。字も真名も無い故、好きに呼んでくれ」

その言葉に星はニヤリとしながら答える。

「あい、解った。北郷殿と呼ばせてもらう」

この後、桃香達も星とお互い真名で呼ぶ様になった。

白漣の所に転がり込んでから1週間がたった時だった。

白漣は兵からある報告を聞いていた。

「何！？ またか！？ ここの所多いな……解った。黄巾党の領内
進入を食い止めるぞ！！」

そう言うとき白漣は軍を編成し、自領の国境近くに軍を派遣した。

一刀達や星もまたソレに同行黄巾党討伐戦に参加した。

先ず一刀達は作戦を立てる為、陣内で議論していた。

「今回の襲撃の人数は約5千、南下している。さて、どう撃退する
か……」

その疑問に一刀は答える。

「地形から戦術を構築するなら、この谷間に誘い込み、頭上から落
石で攻め立てた後、囫部隊が追い討ちを掛ける。そして、谷間の入
り口に隠れている兵を動かし敵を破る。今のところ考えられる兵の
損失を抑え、尚且つ敵を一網打尽にする手はこんな所か……」

一刀の案に白漣は疑問を投げかける。

「相手が策に気付く可能性は？」

その質問に一刀は確信めいて答えた。

「偵察部隊の報告からして敵は組織的な行動と呼べるものは群を成しているぐらいしかない。進軍速度もバラバラ、前面にいるはずの槍隊、中間であり主力の歩兵の配備も後方支援の弓隊も散発的に配備になっている。後方かく乱の為の工兵や工作部隊の存在も確認できない。明らかに素人の配備だ」

一刀の言葉に感心しながら白漣は頷く。

「解った。一刀の策で行こう」

全員が賛成したかに見えたその時だった。

これに異を唱えたのが星だった。

「伯珪殿、高が獣に策を弄するなど愚の骨頂。全軍が野に出て戦うが宜しいかと」

その言葉に白漣が頭を掻きながら怒鳴る。

「あのな！ 相手は獣とは言え群を成している。それを何の策無く広い場所で戦うなどそれこそ愚の骨頂だろうが！！」

一刀とて白漣と同じ気持ちだが、客将の立場から白漣と星の成り行きを見守る事にした。

星は鼻で笑いながら言う。

「だから貴方には天を掴む器では無いのだ」

その言葉に白漣がキレて言おうとした時に、流石に不味いと思い、一刀が割って入る。

「星よ、幾らなんでもソレは言い過ぎだ。それに貴公は自分の考えを他人に押し付けるはどうだろう？　そなたは兎も角、その無茶で傷つき、死ぬのは兵達だ。ソレを考えての決断であるならば私は何も言いはしない。だがな、貴公のその考えは兵に要らぬ犠牲を強いる物だ。将が華々しく活躍できるのは兵達が命を懸けて前線を支えているからに他ならない。貴公が勝手な虚栄心から無策に兵を動かして損失させると言うなら君の考えには賛同しかねる」

その言葉に明らかな落胆の目で一刀を見ながら言う。

「結構、私は客将の身、御二人に従おう。では……」

そう言い、天幕から出る星。

白漣は申し訳無さそうに言う。

「すまない、一刀……私の監督不足だ」

その言葉に一刀もまた詫びる。

「此方こそ、客将の身でありながら要らぬ事を言ってしまった。申し訳ない。白漣」

その時だった、兵が勢い良く飛び込んできた。

「も、申し上げます!!」

その兵に白漣が怒鳴りつける。

「何事か!？」

兵は慌てながらも報告を行う。

「趙雲將軍が単騎で敵軍に突撃を開始しました!!」

その報告に白漣と桃香達は驚きの声を露にしたが一刀は冷静だった。

「白漣! 私と愛紗の部隊が星を連れ戻し、囀部隊になる! 君は本体の指揮を! 桃香と鈴々は追いつち部隊の指揮を取ってくれ!

愛紗! 直ぐに動くぞ!」

この命令に愛紗が難色を示す。

「な!?! ご主人様が自ら戦場に!?! 危険です!! 此処は私だけで対応します!!」

その言葉に一刀はアッサリ切り捨てた。

「駄目だ。今回は囀作戦でもあるが星の救出作戦でもある。二つの作戦を同時に行わなければならない。愛紗、君は部隊の運用は初心者だ。経験も浅い。本当なら私一人で指揮をして、敵に少数と油断させたいが、それでは愛紗達が納得しない。なら、愛紗の部隊だけで私が同行する。星を救出後、敵の進撃速度に合わせて敗走したと見せかけて後退するぞ」

その言葉に愛紗は渋々と了解する。

不安そうに桃香が言う。

「危険だと思ったら退いてね、ご主人様」

その言葉に一刀は微笑みながら頭を撫でて言う。

「安心しろ桃香、私はこんな所で死にはしないさ」

「ハイ！ 信じてます！ 愛紗ちゃんも頑張つて！！」

「ハイ！ 桃香様！！」

その言葉を聞き一刀と愛紗は戦場に向かった。

その頃、星は黄巾党の部隊と戦っていた。

「如何した！ 如何した！ 群れなければ何も出来ない下種共が！」

その言葉を聞き激昂した黄巾党の群は口々に叫ぶ！

「糞！ 愚弄しおつて！」

「困め！ 困め！！ 相手は一騎ぞ！！」

「殺せ！！ 罅り殺しにしろ！！」

しかし、星の神速の槍の前に黄巾党の群は刺し殺されていく。

だが、星が優位とは限らない、戦いとは強者が勝者と言う法則は当てはまらない。

どんなに優れた武将でも子供が持つ短刀1本で急所を一突きされれば一溜まりも無い。

軍隊蟻の様に群れる黄巾党に正直、星も手を焼いていた。

「しかし、数が多い…… 賊徒と侮りが過ぎたか……」

そう呟いた時だった。

「取った！！ 死ねやあああああああ！！」

背後から剣を持った黄巾党が星に襲い掛かる。

回避も防御も間に合わない。

星が死を覚悟したその時だった。

突如、星を襲おうとした黄巾党が宙に浮かぶ。

「な、な、な」

訳も解らぬまま空中でジタバタする黄巾党。

次の瞬間、星を襲った黄巾党は信じられない速さで後方に吹き飛ばされ、地面に叩きつけられ気を失う。

星を含め辺りは静まり返る。

静まり返った戦場に馬の蹄の音だけが響き渡った。

星を含む全員が蹄の音と馬の嘶きを聞いた。

其処には白い着物を風に靡かせながら突撃する一刀だった。

一刀は馬から飛び降り、空高く舞い、鮮やかに着地をすると同時にライトセイバーを引き抜いた。

そして、高速で近くの敵の武器を一瞬で破壊し、敵の首を跳ね飛ばした。

その余りの速さと鮮やかさ、そして蒼い光の刃の美しさに星やその周囲にいた黄巾党ですら見ほれていた。

「!?! 何をしている!!! アイツを殺せ!!!」

我に返った黄巾党の一人がそう叫ぶ。

一斉に一刀を殺さんと襲い掛かる。

しかし、一刀は鮮やかに舞い踊る様にライトセイバーを振るい敵をなぎ倒す。

その鮮やかな腕前に黄巾党達は恐れを生ず。

「何だあの剣は！？ コツチの武器が簡単に切られた！？」

「コイツ無茶苦茶強いぞ！！」

「あの女よりも強い！！ 全員、あの女は無視してコイツから殺せ！！」

その様子を見ながら星は戦場にあるまじき思考に耽る。

（何と強い…… 北郷殿の強さがこれ程とは…… ソレにあの剣…… あの蒼く光輝く剣は一体……？ ソレにあの剣術、見たことが無い…… まるで舞い踊る様な美しいさの中にも力強さが感じられる。そして、防御の時にはまるで城の城壁の様な堅牢さを感じる…… 北郷一刀…… 知れば知るほど面白い御仁だ）

星は知らないだろうが、一刀が戦いに用いている剣術は、フォーム3のソレスとフォーム5のシエンを戦術に合わせて使い分けている。

このフォームとはライトセイバーを用いた戦闘様式でジェダイの歴史と共に無数に編み出され、そして洗練されたものもあれば、消えていったものもある。後のジェダイ達はこれらをいくつかのフォームとして体系化した。

その中で一刀が使うフォーム3のソレスは防御主体の剣術であり、銀河系にプラスター技術への対抗策として編み出された偉大な剣術であり、完璧に極めれば、対集団戦で敵に包囲されてもその防御の壁は破れない程、堅牢なフォームである。

因みに、この剣術を極めたジェダイの中に、オビ＝ワン・ケノービ

がいる。

フォーム5のシエンまたはドジェム・ソと呼ばれるフォームはフォーム3では受身過ぎる。かと言ってフォーム4では非力過ぎると考えたジェダイ達がより攻撃的なフォームを開発した。ソレがこのシエンである。大抵の物質を切り裂くライトセイバーとフォースで強化した肉体を利用して相手に強烈な一撃を見舞い、確実に仕留める剣術として考案された。

因みに、この剣術を極めたジェダイにはアナキン・スカイウォーカーがいる。

星が考えに浸っていると怒号の様な足音が響く。

「ご主人様！！ 御無事ですか！？ ご主人様！！」

愛紗が叫ぶ様に一刀を呼ぶ。

「愛紗！ コツチだ！！」

ソレに反応した一刀が愛紗の呼びかけに答える。

愛紗が一刀と星の元に駆け寄る。

「愛紗、一戦交えた後、敗走すると見せかけて引くぞ」

「ハイ、ご主人様！」

その言葉に星が噛み付く。

「引くと言っか！？ 我が方が優勢だと言っに！？」

その言葉に一刀は星の頬を叩いた。

「いい加減にしろ。此方の方が兵数が少ない。状況を見極めろ」

その言葉に星は悔しそうに俯く。

「愛紗！ 頃合だ！ 兵を引け！！」

その言葉に愛紗は反応する。

「解りました！」

一刀はそう言う、星の服の襟を捕まえると口笛で馬を呼びソレに飛び乗る。

愛紗は兵を引かせる合図をする様、命じた。

銅鑼が戦場に鳴り響き、兵達は脇目もくれず一目散に後退した。

ソレを見た黄巾党は喰らい付いた。

その頃、白漣は後方より土煙を確認する。

「来た！　どうやら順調の様だな……伝令！！」

「ハッ！」

その言葉に伝令の兵が駆け寄る。

「各部隊に連絡！　獲物は餌に喰いついた。網の準備をしろ！！
桃香達にも連絡しろ！」

「ハッ！！」

そう言う伝令は走り去る。

暫くすると、一刀達が溪谷に飛び込む。

その後方には敵が脱兎の如く追ってきた。

「よし、来た！」

そう言うのと、白漣は黄巾党が溪谷の中腹に差し掛かった所で手を振り上げソレを振り下ろす。

その瞬間、溪谷の上から岩が降り注ぐ。

ソレに慌て、撤退しようとした黄巾党の後方に桃香と鈴々の部隊が追い討ちを掛けた。

こうして黄巾党は半数以上が包囲され、降伏、捕虜となった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1920q/>

Three kingdoms wars

2011年1月19日08時51分発行